

第41回 Kozoom28 テーマ「芸術の秋に思う」

清水健二

秋と言えば食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋、芸術の秋等を連想する。芸術活動として、美術・音楽・演劇・舞踊などの他に庶民の活動として秋祭りがある。今回その中で長く趣味の一つとして私は彫刻に親しんできたので、その事について拙文を綴ってみたいと思う。

丸3年半、新型コロナ禍で、多くの美術展の開催が、中止したり 規模縮小で発表会が停滞した。今年に入ってコロナ感染の制限が緩和され、夏から秋に向かって一般公開が始まった。私の所属する美術協会も 9月中旬に第76回展が豊中市立文化芸術センターで開催され、私も彫刻の部門から出品した。美術展開催に当たって協会(現在約150人で絵画部は85%、彫刻部15%の会員構成である。10年前からみて半減している)の内で準備委員会が役員を含め 20名程が集まり進められた。そのなかで展示PR用のポスターの背景に、私の彫刻作品が候補に上がった。2点の作品の写真を求められた



「誓願」



「春を待つ」

ので、両手を絡ませた「誓願」と題する作品と、雪国の母と子供像の「春を待つ」という作品を提出した。委員会のメンバーの多数決でどちらかを採択される事になった。委員会は男性と女性の人員構成はほぼ同数だが、絵画部門が9割を占めていて、委員各自の好みから「春を待つ」に決定した。評決では概ね男性は「誓願」が多かった事に絵画部門の方々の趣向に私は関心を持った。

「誓願」制作のヒントは、かつて京都の東寺を訪れた時、講堂に安置されている平安時代初期の仏像で五大明王の一つ、降三世(こうざんぜ)明王の印相の迫力に感動し、自分の手をモデルに制作してみようと思い、1.2倍大の作品にしたものである。明王は怒りの形相をし、私達衆生を救い教化してくれて、心の中の魔障を払い除けてくれる仏とされている。降三世明王は貪

第76回 創造展
2023年9月13日(水)~9月17日(日)
AM10:00~PM6:00(入場PM4:30まで)
併催 第75回記念創造展受賞者作家展
豊中市立文化芸術センター
(展示室・多目的室)
大阪府豊中市豊秋町3-7-2
阪急宝塚線「豊秋」駅下車
後援
大阪府 豊中市 豊中市教育委員会 大阪市 大阪市教育委員会 読売新聞社
公募
絵画・彫刻
誰でも応募できます。20歳以上100歳まで
作品の大きさ200cm(横長以上)
彫刻は下等彫刻に限定
(展示時期で不明な点はお問い合わせ)
〒599-0117 豊中市高島2-11-22-702
TEL/FAX 072-299-0913 西田 隆
● 入場 豊中市立文化芸術センター
9月12日(火) AM9:30~AM10:30
● 撤出 9月18日(月) AM9:00~AM11:00
制作と発注の委託先株式会社ルビーツ <http://sozobijutsu.com>

レプリカト油絵具
美術展ポスター



降三世明王像

人類は太古には洞窟に住み、壁に身近な動物の絵を描いたり彫刻したりしてきた。集団で住み始めた頃から土を焼結して食器を作ったり、土偶や埴輪など様々な形のもの、人物像や動物像など、また日常生活の必需品や装飾品の手作りの作品が多く各所で発見されてきている。つまり「用と美」が共存し、近代の言葉でいうならばアート(芸術)は人々の暮らしの中に存在したと言えよう。

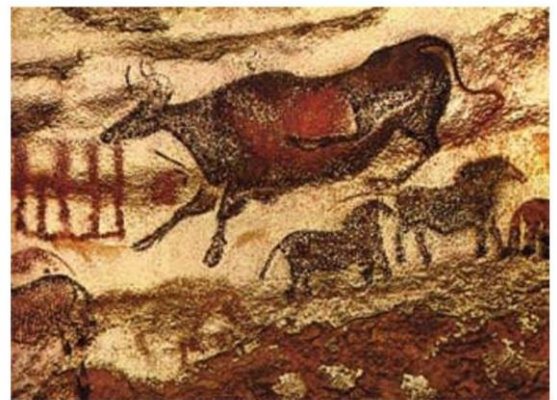


現在の「太陽の塔」(岡本太郎設計)

欲や怒り、愚痴を降伏させてくれる役を担って、両手をからませた印相はその仏の法力を表現して呪文を唱える時の仕草と言えるものである。

一方「春を待つ」は滋賀県の湖西、高島市は雪の多いところで、ここで出会った母と子供二人をヒントに創作したものである。提出した写真の背景は共に、私の作品に対する制作意図が伝わるよう、明王像と雪景色を配した。

絵画にしろ 彫刻にしろ、鑑賞する人の経験や好みに支配され、基準が無いだけに評価は様々である。ここでは「彫刻の美」について論じるつもりは無いが、一般的には絵画と異なり、立体という3次元の作品は量(マス)の美が求められる。作品には均整とバランス、規則性と律動性、そして触覚の美が挙げられる。私はそうした具象彫刻の基本を教えられて来たが、何より物作りが好きで、その楽しみが今も飽きることなく続けてこられたと思っている。



太古のラスコー岩窟画

現代彫刻には抽象造形が多く、古くから木や粘土(塑像)、石が素材だったが、最近では鉄、紙、ガラス、プラスチック等が使用され造形も多様化してきている。一般の人には抽象造形は馴染みにくいですが芸術家には好む人が多い。例えば岡本太郎(1911~1996)は「芸術は爆発だ」とか「何だ、これは!」といった意外性を重視する人であった。1970年大阪万博で「太陽の塔」を設計し、人々を驚かしたが、あれから半世紀を経て今なお存在感を保ち、彫刻として周辺の

環境に溶け込み人々に馴染まれている。また岡本氏は縄文時代の火焰土器に触れ、古代人の発想に衝撃を受けた事を語っている。

身近なところでは、1969年にプロ野球の近鉄バファローズの千葉茂監督から依頼を受けて、旗印やロゴマークに猛牛の絵を創作し進呈している。それが今日のオリックスに引き継がれているのは、そのシンプルで独創性が優れているからである。

絵画にしろ 彫刻にしろ、具象、抽象を問わず芸術作品と言われるものは、観るもの、作るもの、触れるものとして人々の心に潤いと楽しみを与えてきた。人々は自然と共生しながら日常生活の暮らしの中で見聞きしながら美を感じ、それを表現したい気持ちから芸術作品が生み出されるものであると私は思っている。寺院を訪れ仏像を拝顔しながら、その美から慈愛のオーラを受け、安らぎと祈りの心が湧き上がってくるのは、まさに芸術の力と言えるのかも知れないと感じている。

令和5年11月 記



縄文火焰土器



バファロー(岡本太郎)